野の春

わしはお前が生まれたときから
ずっと、この子には他の誰にもない
秀でたものがあると思うてきた。

2018年 新潮社

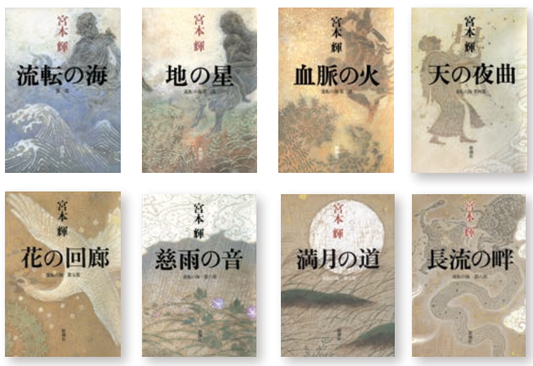
Story

五十歳にして授かった、思いもよらぬ子宝。熊吾は病弱な乳飲み子を前にしてこう誓った。
「お前が二十歳になるまで、わしは絶対死なんけんのお」
戦争をはさんで浮き沈みの激しい人生を歩んできた熊吾は、誓いどおり二十歳をむかえた息子の姿を見届けることができた。その後の彼を待ち受けている運命とは。
宮本輝のライフワーク、ここに完結する。

『流転の海』シリーズ

『流転の海』シリーズは、宮本氏のライフワークとなる長編連作である。宮本氏の父、母、そして自分自身をモデルとしているといわれ、物語は主人公の熊吾に関わる個性的な人間を中心に、終戦直後の混乱の中、必死にもがき生きてきた人々の生きざまを描く。舞台は、時代が進むにつれ、故郷の愛媛、新天地を目指して移住した富山、そして再び大阪へと変遷すると同時に、父を中心と描かれる世界から、息子の目を通した物語へとなってゆく。

『流転の海』(流転の海 第一部)福武書店1984年7月・新潮社1992年11月
『地の星』(流転の海 第二部)新潮社1992年11月／『血脈の火』(流転の海 第三部)新潮社1996年9月
『天の夜曲』(流転の海 第四部)新潮社2002年6月／『花の回廊』(流転の海 第五部)新潮社2007年7月
『慈雨の音』(流転の海 第六部)新潮社2011年8月／『満月の道』(流転の海 第七部)新潮社2014年4月
『長流の畔』(流転の海 第八部)新潮社2016年6月／『野の春』(流転の海 第九部)新潮社2018年10月



感動の最終作

自らの父親をモデルにして描いた大作も遂にフィナーレ。何度も逆境に立たされながらも、たくましく生きてきた松坂一家には、どんな場面でもポジティブなものを感じてきました。それはまるで「何がどうなろうと、たいしたことはありませんよ」と熊吾に語りかけられているかのよう。感動の最終場面もそれは変わらず、暖かい春の木漏れ日に包まれているような気分になりました。